

矢掛の山城

矢掛町が江戸時代（1603～1867）に宿場町となるずっと以前から、この地域は旧山陽道の重要な往来だった。この街道は、京都などの古都と西日本を結び、九州まで延びていた。

15 世紀から 16 世紀にかけて、敵対する武将たちが領土の拡大や防衛のために戦う中、旧山陽道のような主要な幹線道路を監視することは非常に重要だった。矢掛地域は監視のための戦略的な場所であっただけでなく、山城に理想的な山の地形を持っていた。

山城とは、中世に築かれた城郭のことで、山の地形を利用して防御のために築かれ、武器や兵を備えておくための物見櫓や建物があった。防御のためにより恒久的で精巧な構造で建てられた後世の城とは異なり、山城はシンプルな木造建築で、籠城に備えて物資を貯蔵するための大規模な倉庫があった。

この地域で最も著名な山城のひとつが、1205 年に庄家長によって築かれた猿掛城である。彼の一族は武功の褒美としてこの地を与えられたが、遠く離れた武蔵国（現在の東京都とその周辺の県の一部）の友軍は、往来の多いこの地域を監視下に置いておくことを望んだ。そのため、猿掛城が築かれた。小田川沿いの山の上にこの城はあり、対岸の旧山陽道が間近に見渡せた。険しい地形は多くの山城にとって重要な防御条件であったが、この山は非常に

険しく、現在でもロープでしか登れない箇所がある。重い武器を携えた甲冑姿の武士たちには、城にたどり着くことは困難であったろう。1571 年まで、庄氏 15 代に渡って猿掛城を守り抜いた。その4年後にあたる1575年、西日本屈指の大名家に属する毛利元清（1551-1597）がこの城を手に入れた。

籠城戦に耐えられるだけでなく、他の戦術にも対応できる本拠地を元清は必要とした。彼は地域の毛利勢をより踏破が容易で、眼下に町や道路、川を見渡すことができる茶臼山に移した。1584 年、茶臼山城が完成し、1587 年にはその城が豊臣秀吉（1537-1598）が敵対勢力を制圧するため元清を九州に派遣する際の拠点となった。

毛利家は、本州西部の大部分を支配していたにもかかわらず 1600 年の関ヶ原の戦いでは敗軍の側に属しており、矢掛地域は彼らが失った領土のひとつとなった。その後の比較的平和な江戸時代、幕府は城の数を制限し、矢掛の城をはじめとする全国の山城は廃城となったり、取り壊されたりした。今日、猿掛城跡は、依然として登りごたえのある山であり、その道中では城の石積みの跡を見ることができる。茶臼山城跡は、矢掛町を見下ろす静かな公園になっている。